

(西暦) 2014 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

訪問リハビリテーションにおける“1日の生活の振り返りプログラム”の効果
—「作業バランス自己診断」を用いて—

学位の種類: 修士(作業療法学)

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学域

学修番号 13896606

氏名: 野尻亜希

(指導教員名: 大嶋伸雄 教授)

注: 1 ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 ページ (A4 版) 程度とする。

【はじめに】平成 25 年度の生活期リハビリテーション(リハ)に関する実態調査では、訪問リハで「関節可動域訓練」「筋力増強訓練」「ストレッチ」「歩行訓練」の割合が高くなっていると報告され、具体的な生活課題に取り組めていない現状が伺われる。この背景には、対象者が日々の生活を見直す機会が少なく、現在の生活課題がわからないことや、これからの生活を具体的に思考することの困難さがあるのではないかと推察される。この課題を解決するため、小林(2004)の「作業バランス自己診断」を用い、セラピストと共に 1 日の過ごし方を振り返るプログラムを作成した。本研究の目的は、プログラムの心理面への効果を明らかにし、訪問リハにおける「作業バランス自己診断」の介入手段として有効であるかを検討することである。

【方法】訪問リハのサービスとは異なる時間に、研究者が対象者宅を 1 週間に 1 回、合計 3 回訪問した。各訪問は 30 分から 1 時間とした。考案された“振り返りプログラム”は、「作業バランス自己診断」を用いた振り返りと半構造化面接で構成されている。研究デザインはミックス法を用い、量的データではプログラム前後の満足度 100 点法(生活満足点)と特性的自己効力感尺度を使用し、質的データではプログラム中の半構造化面接の音声データを使用した。

【結果】対象者は、要支援 2 から要介護 4 の 7 名(男性 4 名、女性 3 名: 平均年齢 75 ± 9.6 歳)であった。生活満足点は、プログラム前後で有意差($p=0.04$)を認めた。特性的自己効力感では、一定の傾向は見られなかった。質的データを KJ 法で統合した結果、5 つの構造に集約された。「作業バランス自己診断」を共に行うことは、『考えるきっかけ』を与え、『生活を支えるもの』に気づき、『生活に対する肯定的な意味づけ』や『将来への思い』を導いていた。一方で、対象者の『隠された思い』が明らかとなり、その思いが、日常の中で生活について考えることを阻害している可能性が伺えた。

【考察】対象者が『生活に対する肯定的な意味づけ』について語っていることから、生活満足点が向上したと考えられる。また、特性的自己効力感尺度の得点は、先行研究の平均値に比べ低い傾向にあった。これは、対象が訪問リハ利用者であり、疾病や障害を有しているために、生活の中で【理想の生活は叶わない】という思いを感じているためだと推察された。プログラムの実施によって【理想の生活は叶わない】という否定的な感情を持ちながらも、【生活の客観視】をすることによって【これからの生活を考える】という変化を促通し得る可能性が得られた。

【まとめ】プログラム実施後は、『将来への思い』が表出され、生活満足点が向上したことから、今後、訪問リハにおける一つの介入手段として応用できる可能性が示された。